

第19回富士山写真大賞 総評

河口湖美術館のフォトコンテスト「富士山写真大賞」は19回目となり写真愛好家はもとより、写真界や富士山をこよなく愛する方々に支えられ、注目のフォトコンテストとしての地位を獲得して居ります。

このコンテストの最大の魅力は何と言っても被写体の主役となる「富士山」に尽きると言っても決して過言ではありません。四季折々、移ろう季節の中でさまざまな表情を見せる魅惑の富士山、その崇高さ、スケールの大きさ、気象の変化や、昼夜の光の中で見せる千変万化の表情はそのひとときを見る全て人の心の奥底に深く焼きつくほどの魅力にあふれています。入賞作品展にお越しの皆様が鑑賞される入賞作品は、そうした魅力に溢れた富士山を、カメラを通して写し止めた優れた作品群なのです。入賞された方々の多くはここぞと思う撮影ポイントに何度も通い、この一瞬を写し止めたことでしょう。

心を込めて写しとった一瞬の美学が最高級のプリントで全倍サイズに引き伸ばされ、美術館の壁面に飾られたときの入賞者の喜びは、全国各地の他のフォトコンテストでは味わう事が出来ない魅力に溢れ、被写体の富士山とともに応募者を強くひきつけている大きな要因です。河口湖美術館は美術館として本来の役割を果たしながら、このように写真という分野に落差をつけず、絵画や他の美術作品と同じように大切に扱い、美術館のコレクションとして他の美術品と同等に保管されていることに深く敬意を表します。「富士山写真大賞」というフォトコンテストを通して写真文化に貢献して下さる河口湖美術館、そしてこのコンテストの第1回からの実務を担当されている美術館の担当者をはじめ関係者の方々に深く感謝いたします。

それでは第19回の応募者や入賞作品などにふれていきます。応募点数は1135点、応募者354名。その中で郷土富士での応募者36名78点。男性315名、女性39名で最年少の7歳から最年長88歳と大変幅広い世代の方々が応募されていますが、中でも60歳代102名、70歳代118名と最も多く、50歳代48名40歳代25名、80歳代24名、30歳代18名、20歳代8名となっています。市場がフィルムカメラからデジタルカメラに移行してしまったこの数年、それでも尚高世代の方々による応募が多いと言う事は、富士山はいくら写し続けても、写し飽きない素晴らしい魅力に富んだ被写体なのだと認識します。当コンテストに応募し入賞の喜びにいつまでも浸っていたいという思いに駆られた結果ではないかと私は推測しています。そしてデジカメやスマホ等の普及によって年代層の広がりが感じられ、作品内容も幅広く、表現方法や捉え方などにも変化が感じられるようになってきています。今回は応募者数、応募点数ともに前回より若干減少しましたが、内容や表現方法に作者の創意工夫がさらに進化をきたし、審査にも熱が入りました。ただ残念なことに50名の入賞者の中に今回は女性が1名しか入らなかったこと、若い世代の入賞作品が少なかったことなどが心残りでした。

それでは入賞作品についてふれていきます。応募点数1135点の名から最高賞の金賞を射止めたのは札幌の太田繁さんの作品「夕日に染まる富士山」でした。太田さんは前年度も「冬の火口」と題した雌阿寒岳の空撮の作品で上位入賞を果たしていますが、今回も空撮でさらに頂点を究めました。夕照に染まり雲海の上に聳え立つ富士山、チャーターしたセスナ機がこの時間帯にベストアングルになるようにきっとパイロットの方と綿密な打ち合わせをして近づいたのではないかと推測されます。日本のシンボルとしての富士山、その崇高な容姿と雄大さが夕照の輝きの中で精彩を放っています。作品を眺めて目を瞑ると、余韻となっていくまでも心の奥底に響き渡ります。

準最高賞（銀賞）となった千葉の稗田裕文さんの「荒磯の富士」。ほのかに朝焼けの光に輝く富士山を後方に、

この作品の主役は俺だーとばかりに岩場に波濤のしぶきを上げる前景。タイトルそのままの情景がダイナミックに写しとられていて極めて明解で清々しい作品となっています。

第3位（銅賞）、画面いっぱいドカーンと配した神奈川の上野祐司さんの作品「秋の朝霧」。冠雪した富士山と朝もやに霞む森の木立とのバランスが巧みで外連味（けれんみ）のない素直な作品に仕上がっています。上野さん以外にもこのように富士山そのものを画面いっぱいに配して印象的な作品となったなかでは、入選となった静岡・沼倉秀人さんの「紅の夜明」、同じく入選の東京・田村志郎さんの「艶麗の刻」が目を引き作品として心に残ります。このように富士山を画面に大きくあしらった作品とは正反対に、小さく写し、前景や天空に主役となるような光景を扱った優れた作品も数多くありました。そのような作品で印象的だったのは、入選と特別賞を受賞した山梨・権正光夫さんの作品「清流」。この作品はまるでナイアガラ瀑布の奥に富士山が見えるような錯覚さえ感じられる巧みな絵作りとなっています。他にも入選された神奈川・曾布川善一さんの八ヶ岳で写した「風紋の彼方」、入選と特別賞の山梨・竹村幸和さんの「月光の空に」、山梨・小俣亮太さんの「雨あがりの彩」、群馬・天沼和男さんの「実りのアーチ」、神奈川・齋藤徹也さんの「PLANETARIUM」、山梨・羽田好男さんの「雲のドラマ」、栃木・矢嶋健次さんの「大動脈」、三重・宮崎正秀さんの「飛翔」、静岡・望月正晴さんの「嵐は去ったが」など、それぞれの作品の特徴は富士山を点景として配置しながらも稀にしか見る事の出来ない気象変化による雲の形態や嵐の降雨の後のほんのわずかな時間帯での虹や白い虹など、珍しい自然現象、昼夜を問わず富士山をテーマに通いつめ、ベストアングル、ポジションを探し続けた方にしか写せないような好作品が多く見応えがありました。

尚日本各地のふるさと富士をテーマとした作品は36名の方の78点と前回より増えたのですが、入賞した作品は北海道の利尻山1点と群馬の榛名山2点の3点のみと前回は下回ってしまいました。群馬・角田侃男さんの「榛名の朝焼け」、同じく群馬・市村弘幸さんの「晩秋の榛名湖」は2点共に榛名湖も四季折々の移ろいの中でフォトジェニックなチャンスを掴めばこんなに素敵なシーンを写す事が出来るのかと思うほどの出来栄です。また厳冬の利尻山を写した山梨・千村信さんの作品「風雪に耐えて」は山岳写真としても超一級の出来栄です。ところで今回の入賞作品を改めて見直したときに気付いたのですが、女性の方の応募者が39名いらしたのに入賞されたのは鹿児島県の福重めぐみさんお一人だけだったことがとても残念でした。

当コンテストは19年間という年月を重ね、応募される方々も超ベテランからキャリアの浅い方、年少者や女性まで年々その枠を広げています。そうした幅広い方々が応募しやすく、より興味をもたれるように、募集のチラシでおわかりのように「富士山」に関わるあらゆる内容の被写体での応募が全てOKとなっています。私も長年にわたり全国さまざまなフォトコンテストの審査を手掛けてきましたが、このように寛大でしかも長続きするコンテストはめったにないものと確信して居ります。

主催者である河口湖美術館、経費を負担される富士河口湖町、そして審査を手掛ける三宅修氏と私…。さらに申せば富士山が永遠の輝きを保つ限り続いていく事でしょう。

これからも皆様のさらなるフォトワークを期待して「第19回富士山写真大賞」総評の筆を置きます。

横山宏（審査員 写真家 1939年生まれ）